

紙上講習会「カーロイ・ミハーイの生涯を通じてハンガリーの歴史を学ぶ（第2回）」

外国学図書館LSの青山と申します。

「カーロイ・ミハーイの生涯を通じてハンガリーの歴史を学ぶ」と題した紙上講習会を行います。

この講習会の目的は以下の2点です。

- ①カーロイ・ミハーイ（1875-1955）¹という政治家の生涯について学びながら、彼の生きた20世紀前半のハンガリーの歴史の流れを知ること。
- ②現在のハンガリー政治の場におけるカーロイの扱われ方を知ること、現在のハンガリー政治の特徴を学ぶこと。

目次

1. カーロイ・ミハーイとはどんな人？
2. カーロイの生涯①1918年革命まで（ここまで第1回）
3. カーロイの生涯②戦間期以降
4. 撤去されたカーロイの銅像
5. まとめ（ここまで第2回）

📌第1回のポイントのおさらい

- カーロイは若い頃からいとこ叔父の教えを受け、下層の人々の社会・経済的問題について関心をもっていた。
- 1912年以降、本格的に立場が急進化し、普通選挙や土地改革などの急進的政策を求めるようになった。
- 第一次大戦期には国内の反戦運動の中心的存在になり、国内での影響力も高くなった。
- このような状況下で、大戦末期の1918年10月末に革命がおこり、カーロイによる政権が成立。カーロイは普通選挙をはじめとした内政の民主化を目指したが、第一次大戦直後という特異な状況によって実現できなかった。→1919年3月にカーロイ政権は崩壊へ。

¹ 本講習会資料ではハンガリー系の人名を姓・名の順で表記する。

参考：19世紀後半～20世紀前半までのハンガリー政治体制の変化

1867年	オーストリア＝ハンガリー二重君主国の成立。
1918年11月	二重君主国崩壊、カーロイを首班とした共和制国家の成立。
1919年3月	カーロイ政権の崩壊、共産主義政権の樹立。
1919年8月	共産主義政権崩壊。旧カーロイ政権内の右派政治家による一時的な政権が樹立。その間、ホルティによる政権掌握の準備が進む。
1920年3月	ホルティを摂政とした、国王なき王制が成立。
1920年6月	トリアノン条約締結により、国土の3分の2を失う。
1946年2月	王制の崩壊、共和制の樹立。しかし数年後には社会主義体制へ。

3. カーロイの生涯②（戦間期以降）

〈1919年の共産主義政権樹立後〉

カーロイは共産主義政権樹立後、ハンガリー国外へ亡命した。これ以降、第二次大戦後までカーロイは国外で政治的活動を行うことになった。

カーロイ政権期に、協商国の支持の下、ルーマニア人、スロバキア人などの少数民族が独立を宣言し、少数民族による軍がハンガリー領の国境を占領しだしていた。カーロイ政権が領土を守り続けることは困難になり、カーロイらに代わって共産党・社会民主党左派による共産主義政権が樹立した。共産主義政権は赤軍をつくって少数民族の軍に対抗したが、協商国の支持を受けている少数民族側に勝つことはできず、わずか5カ月後の1919年8月には政権が崩壊した。

その後、旧カーロイ政権内の右派政治家が一時的に政権を掌握した。その裏では、海軍軍人であるホルティ・ミクローシュが軍をつくっており、ブダペストに進駐していたルーマニア軍と対峙することになった。交渉の末、ルーマニア軍は撤退し、ホルティの軍がハンガリー全土を掌握したことで、国民のホルティへの期待が高まった。そして1920年、ハンガリーは国王なき王制をとり、ホルティが摂政になった。このホルティ体制の下、カーロイは「反逆者」として扱われることになった。

〈ホルティ体制下〉

1920年、第一次世界大戦の講和条約であるトリアノン条約によって、ハンガリーは国土の3分の2を失った。ホルティ体制では失った領土を奪還することが掲げられ、さらにこの領土喪失はカーロイに責任があるとみなされた。カーロイは反逆者とされ、カーロイの財産を没収するための法律も制定された²。

² 既に第一次大戦中に反逆行為を行った者の財産没収について定めた法がつくられてい

カーロイは亡命地で、1918年のカーロイ政権のメンバーだった政治家ら（彼らは自分たちを「十月主義者」と自称したことから、以下「十月主義者」とする）と共に、自分たちが1918年の政権で実現させたかったハンガリーの民主化の理念を訴えながら、ホルティ体制の批判をした³。特に領土問題について、カーロイらは少数民族の自治を認めながら民主主義的な連邦国家をつくる構想を描いていたことから⁴、ナショナリスティックな失地回復運動を展開するホルティ体制⁵を批判した。しかし、カーロイら十月主義者のこのような亡命地での活動が、ハンガリー国内の政治を変えることはできなかった。さらに、第一次世界大戦の戦勝国の支持も受けながら独立し、新しい国家を築いている少数民族にとっても、十月主義者らの主張が影響を及ぼすことはなかった。また、この亡命地での活動中、カーロイは共産主義者に近づくようになり、共産主義者との関わりが増えた。ともに活動していたヤーシ・オスカールなどは反共産主義的であったことから、カーロイと徐々に距離をとるようになった。

〈第二次世界大戦後〉

第二次世界大戦後、ハンガリーは再び共和制となり、複数政党制が実現した。1918年の革命の再評価が進み、カーロイは帰国を果たし、カーロイの名誉回復もなされた。1947-49年まではフランスの大使を務めた。しかしやがて共産党の独裁体制が成立し、「章スターリ

たが、限嗣相続は適用外であった。大貴族であるカーロイは広大な限嗣相続地を持っていたことから、限嗣相続地にも適用できるように新たに法が制定された。

1921 évi XLIII. törvénycikk “a hazaárulók vagyoni felelősségéről szóló 1915:XVIII. törvénycikk kiegészítéséről” (1921年法律第43号「反逆者の財産への責任に関する1915年第18号の補足」)

なお、限嗣相続 *hitbizomány* とは、ハンガリーの大貴族家系を中心とした世襲財産相続制度であり、限嗣相続地は他人への譲渡が法的に禁じられていた。相続の順番は長子相続か、もしくは家族内で最年長の人への相続などのパターンがあったが、カーロイのヘヴェシュ県の限嗣相続地は長子相続という形をとり、祖父カーロイ・ジェルジから父カーロイ・ジュラ、そしてカーロイ・ミハーイへと相続されていた(Hajdu, 1978, p.19., Csiffáry, 1999, p.39)。

³ 亡命地でのカーロイらの政治的活動については、主に Hajdu, 1978 や辻河、2013年などを参照した。

⁴ 連邦国家の構想は、カーロイ政権期に少数民族担当大臣を務めたヤーシによって描かれたものであった。この構想については辻河、2009年で詳細に論じられている。

⁵ 右派や愛国主義者を中心に、領土を取り戻すための運動が展開された。1930年代にはナチス・ドイツと協調しながら領土を取り戻そうとした。

ン」という異名を持つラーコシ書記長による大規模な粛清が展開されると、カーロイはこれに抗議する形で再び亡命し、その後二度とハンガリーに戻らなかった⁶。

その後1989年まで続いた社会主義期におけるカーロイの政治的評価について簡単に述べる。社会主義体制成立後、いわゆるスターリン主義的な恐怖政治が行われていた1950年代前半まではカーロイに関する研究は見られなかった。50年代後半以降、カーロイの研究が徐々に活発になり、カーロイの再評価も進むようになった。1962年には、7年前に亡くなったカーロイの公式の埋葬式が、政府によって行われた。革命から50周年を迎える1968年以降にはより一層カーロイ研究が盛んになった。1975年には、ハンガリー国会議事堂前のコシュート広場にてカーロイの銅像が設置された。この銅像をめぐる事件について、この後の章で述べる。

4. 撤去されたカーロイの銅像

近年、カーロイの評価をめぐる政治的な事件も起こっており、カーロイは今なお評価が難しい人物としてみなされている。この章ではカーロイの評価をめぐり、2010年にカーロイの銅像が撤去された事件について紹介する⁷。

2010年、急進的なナショナリストらが、領土喪失の原因はカーロイにあると主張し、コシュート広場にある彼の銅像の撤去を強く求めた。一方、カーロイを民主主義的な国家の先駆者とみなす勢力は、このナショナリストの要求に強く反対した。

2010年は総選挙で保守派政党「フィデス・ハンガリー市民同盟（以下フィデス）」と「キリスト教人民党」が勝利し、現在まで続く両政党連合の長期政権が始まった年であり、さらにトリアノン条約調印から90周年を迎える年でもあった。フィデスの新政権によって、トリアノン条約調印の日である6月4日には追悼集会が開かれ、さらにこの6月4日を「国民連帯の日」と定める法律案が賛成多数で通過した。また、6月3日には、第三政党である右翼政党「ヨッピク」がカーロイの銅像に黒い布をかけるデモンストレーションと記者会見を行い、カーロイ像の撤去を求めた。第二政党である社会党や、市民政治団体「緑の左派」は、このような動きに強く抗議し、領土縮小の責任をカーロイに押し付けることはできないと主張した。

カーロイ像の撤去を求める勢力と撤去に反対する勢力の対立は2011年まで続いた。しかしこの年に、コシュート広場を再建するプロジェクト案が賛成多数で可決された。この案には、コシュート広場を1944年以前、すなわち戦間期ホルティ体制期の状態に戻すことを可能とする内容が含まれており、カーロイ像の撤去も可能であることを意味していた。最終的に、カーロイ像は2012年に撤去され、銅像を作った彫刻者であるヴァルガ・イムレの故郷シオフォークに移動した。

⁶ 第二次大戦後のカーロイの一連の動きについては Hajdu, 1978 などを参照した。

⁷ この銅像を巡る事件については、主に辻河、2012年を参照した。

このようなカーロイを領土縮小の責任者とみなす右派と、民主主義国家の先駆者とみなす左派の対立は、まさに戦間期にみられたホルティ体制側と十月主義者らの対立と似ている。そして戦間期と現代に共通していえることは、どちらの時代も**領土縮小**というハンガリー一人にとっての歴史的悲劇といえる出来事が強く意識されていることである。



コシュート広場にあったカーロイ像（画像の引用元：<https://hungarianspectrum.org/tag/mihaly-karolyi/>）

5. 第1回・第2回のまとめ

- カーロイは二重君主国期からハンガリーの様々な社会・政治問題などに関心を持っており、特に第一次大戦期には反戦運動やハプスブルク帝国からの独立・民主化を訴える運動を積極的に行った。
- 1918年10月の革命の結果初めてハンガリーで共和国が樹立され、カーロイは首相になり、国内の様々な民主的改革に取り組もうとした。しかし第一次大戦直後という特異な状況下であり、また国内の諸民族が次々に独立宣言をするなど、外政面が非常に混乱していたことから、内政の改革はほとんど実現できなかった。
- カーロイ政権崩壊後カーロイは亡命した。ホルティ体制ではカーロイは領土縮小の責任者とされた。カーロイら十月主義者は、自分たちが1918年の共和国で実現させたかった理念を亡命先から積極的に発信したが、具体的な成果は得られなかった。
- 現代のハンガリーにおいても、戦間期のように、領土縮小の責任をめぐるカーロイの評価の対立が見られている。



カーロイの一生を通じて、ハンガリーの激動の近現代史についてイメージを膨らませることができたでしょうか？カーロイのような評価の難しい人物を扱うことで、過去から現在までの情勢を理解することができたのではないかと思います。

〈参考文献一覧〉

辻河典子「ヤーシ・オスカーの1920年代初頭における地域再編構想-「ドナウ文化同盟」(1921年)を手がかりに-」『ヨーロッパ研究』第8巻、2009年、pp.63-82.

辻河典子「現代ハンガリー・ナショナリズム試論-2012年のカーロイ・ミハーイ像をめぐる論争から-」『比較文学・文化論集』第29号、2012年、pp.48-67.

辻河典子「1920年初頭のハンガリー系亡命者と中央ヨーロッパ政治情勢-『ウィーン・ハンガリー新聞』の動向を中心に-」『境界研究』第4号、2013年、pp.53-75.

Hajdu, Tibor, *Károlyi Mihály: politikai életrajz* (カーロイ・ミハーイ：政治家としての伝記), Budapest, Kossuth Könyvkiadó, 1978

【PR】

外国学図書館LSの紙上講習会バックナンバーを図書館Webサイトについて公開中
https://www.library.osaka-u.ac.jp/ta_lectures/



<2021年1月現在の既刊>

- 教職を志す者必見！ 現役高校教員LSのおすすめ名作映画集
- 2020年のアメリカと映画館
- チェンマイでは、ゆっくり、あるくこと。
- イラン留学体験記（第1部：イランでの生活について）
- イラン留学体験記（第2部：イラン滞在中の印象的な出来事）
- カーロイ・ミハーイの生涯を通じてハンガリーの歴史を学ぶ（第1回）
- 2010年代中国における日本映画の上映について